

ブラウザーを活用しよう(5)

1 ページに1曲

先月号で紹介したスクリプトはページを開くと演奏が開始される(読み込むまでは多少時間がかかる)ものでした。

この自動演奏のためのタグを自動的に生成してくれる(但し MIDPLUG) ツールを紹介します。

<http://www.yamaha.co.jp/xg/download/midplug/mptagtag/index.html>
というヤマハのホームページからダウンロードできますが、開くと次のような画面になります。(Windows のみ)



1. パネルのサイズを変えます。(4種類)
2. パネルの色を変えます。(2種類)
3. 演奏させるMIDIファイル名を入れます。
4. そのファイルの所在地を特定します。
5. 自動再生かそうでないかを決めます。
6. リピートスイッチのON/OFF
7. 演奏データの保存を許可するかどうか。
8. IE用のMIDPLUG for XGをインストールしていないユーザーに自動的にインストールします。
9. コメントなどのテキスト(10に記入)を表示するかどうか。
11. タグをHTMLに出力する。

ここで言う「パネル」というのは演奏を制御するボタンの

ついた小さな表示のことです。

現在MIDPLUGが対応しているMIMEタイプは、audio/mid, audio/x-mid, audio/midi, audio/x-midi, audio/wav, audio/x-wav, audio/aiff, audio/x-aiff, audio/basicの9種類ですが、すべて同じ操作で演奏できます。

画像を付けて

教材などの場合は、開かれているページにその教材や楽譜などを画像として表示すれば、音の出る教材になります。

楽譜を綺麗に画面表示するには、Finaleなどのノーテーションがきれいにできるソフトを利用します。Composer's Mosaic等では以前から画面上の楽譜を必要な部分だけ画像としてカットやペーストできましたが、Finaleの最近のバージョンも割に簡単な操作でそれが出来るようになっていました。

イメージ・スキャナーで楽譜やイラストをスキャンして取り込むこともできますが、解像度をケチると五線が4本になったり、付点音符のドットが消えたりします。画面サイズに比例して楽譜が拡大されるような場合、シャギーといわれるギザギザで音符や記号が表示されない解像度を研究する必要があります。しかし、解像度を上げ過ぎると画像データが重くなりすぎて、表示が遅くなったり、最悪の場合フリーズしてしまいます。

Windowsは内蔵メモリの全てをリソースのために使っているわけではありませんから、しばしば「メモリが極端に不足しています」という表示とともに画面や音がフリーズしてしまいます。(Macでは殆どその心配が無い)

MIDIファイルはテキストファイルと同じですからファイルそのものはとても小さくて軽いのですが、「コンティニアス」と呼ばれるエクспRESSIONやボリューム、ピッチベンドなどの連続的の時系列変化を含むデータが多いファイルの場合、演奏時間に関係なくファイルが重くなります。(皮肉なことにそんな重いファイルほど良い演奏のことが多いのですが・・・)

ですから、演奏データは出来るだけ取り込みに時間がかからないよう小さくする工夫をしましょう。

Pro.4等のシーケンスソフトではそれらの連続的の時系列変化を間引いてデータを減らすツールが付いていますから利用すると良いでしょう。(XG-Worksではシンアウト)

HTMLで扱える画像はGIF形式かJPEG形式が最適で、PICT形式やBMP形式は圧縮されていけませんのでデータサイズが大きくなってしまいますから使わないようにします。